

● 糖尿病治療の最前線 ●

甘くみてはいけない 糖尿病の認知症リスク

うつ病と診断され、認知症の治療が遅れたUさん

担当医



久保 明先生

医学博士 糖尿病内分泌専門医
医療法人財団百葉の会 銀座医
院 院長補佐・抗加齢センター長

患者氏名	U・K 様	年齢	55歳	性別	女性	現病歴	糖尿病 アルツハイマー型認知症
------	-------	----	-----	----	----	-----	-----------------

Uさんがお知り合いのご紹介で私のところに来られたのは、1年半ほど前のことです。当時ヘモグロビンA1cは7.8%。経口剤で血糖値をコントロールしていらつしゃいました。

初診のとき少しおかしいなどは感じていたのですが、「最近もの忘れが増えた。ちよつとまづいかも」とおっしゃいます。まだ50代なのでアルツハイマー型認知症には早いとも思いましたが、臨床判断に基づき、認知症と判断し治療をおすすめしました。

ところがその後、ご家族の意向で他の病院を受診されたところ、認知症ではなくうつ病との診断だったそうです。しかし、Uさんの症状は一向に良くなりません。1年後、再度大きな病院の神経内科で診てもらったら、特殊な例ではあるけれど、やはりアルツハイマー型認知症であることが判明したのです。

認知症は症状が出るまで20年かかるといわれており、進行を遅らせるには早めの治療が何より大事です。Uさんのようにお若いとご

家族は認知症を認めたくないものですが、そのぶん治療に至るまで時間がかかってしまつたようです。

糖尿病と認知症の発症には多くの共通項があるため、血糖値が高めの方はもの忘れなどの症状に気がつけておく必要があります。

現在、Uさんはご家族のサポートを得て認知症の治療に取り組まれ、ヘモグロビンA1cの方も7%台前半に下がっています。糖尿病も認知症も、これ以上悪化されないことを望んでやみません。